

1. 研究主題

わかる楽しさを味わえる算数科の授業づくり
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して～

2. 主題設定の理由

(1) 教育の今日的課題

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月26日中央教育審議会）において、

人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつある。

と指摘されており、先述の答申において、「**個別最適な学び**」について以下のように述べられている。

全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「**個別最適な学び**」である。

つまり、「指導の個別化」と「学習の個性化」の両方の視点から、「**個別最適な学び**」が実現されるということである。

また、

さらに、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

と述べられているように、「**個別最適な学び**」は「**協働的な学び**」と一体的に充実させていく必要がある。

(2) 児童の実態から

本校の児童は、明るく素直で、授業中もしっかりと話を聞くことができる児童が多い。しかし、発言する児童に限られていたり、学習に対する意欲が低く、主体的に学習に参加できていなかったりする児童も見られる。授業内容がわからない児童は思考を止めている姿も見られ、学習面、態度面で課題がある。

令和6年度のC R T（標準学力検査）においては、全学年で前年度に比べ結果が良くなっている。〔下表は全国平均を1としたときの得点率を表している。〕

	1年生		2年生		3年生		4年生		5年生		6年生	
	R5	R6	R5	R6	R5	R6	R5	R6	R5	R6	R5	R6
国語	—	0.96	0.91	0.97	0.94	0.96	0.85	0.98	0.95	1.00	0.88	0.88
算数	—	1.00	0.91	0.93	0.88	0.96	0.89	0.98	0.90	1.13	0.83	0.91

この結果から、本校では、一昨年度から授業の問題解決場面において「一人で学ぶ」「友達と学ぶ」「先生と学ぶ」「ヒントカード・ヒントコーナーで考える」など、児童が学習方法を選択できるようにしてきた。そのことが、児童の学習意欲を高めるとともに、基礎的・基本的な知識・技能を高めることに一定の効果をもたらしていると考えられる。しかし、すべての学年で全国平均である1に到達しているわけではないため、昨年度までの取り組みを軸として、方法を改善しながら継続していくのが良いと考えられる。また、算数を苦手としている児童への授業中のアプローチを中心に授業改善を行ってきた面が大きいいため、算数を得意としている児童へのアプローチも考え、児童一人ひとりの意欲を高めていく必要がある。

昨年度途中から振り返りの方法の改善を試みている。ワークシート形式で単元を見通した形を取り入れ、児童が見通しをもって学習に取り組むことができるようにしている。1時間のふり返りの質を高め、それを継続していくことで算数に対しての見方、考え方の深まりを感じられるようにしていきたい。

本研究を通して、問題解決の方法を児童が選択できるようにすることで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っていき、情意面でも「わかった」「できた」という成功体験を積ませることで、学習に対する意欲を高めたり、主体的に学ぶ態度の育成を図ったりしていきたい。以上のことから、研究主題を「わかる楽しさを味わえる算数科の授業づくり ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を通して～」と設定した。

3. 研究の目標

算数科学習において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業づくりを行うことで、児童一人一人がわかる楽しさを味わえるようにする。

4. 研究の仮説

算数科授業の学習過程の中に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることで、児童一人一人が基礎的・基本的な知識・技能を習得し、わかる楽しさを味わい、主体的に学ぶことができるであろう。

5. 研究の内容と方法

(1) 学年・領域ごとに応じた個別最適な学びを取り入れた授業実践

- ・「わかる」を育てる学習過程の改善
- ・「個別最適な学び」の充実を図るための教材研究(授業部)
- ・算数アンケートの実施と分析(調査部)

(2) 個別最適な学びを充実させるための一人一台端末の活用方法の模索

- ・一人一台端末の活用方法の模索と共有
- ・AI型教材の活用方法の模索(キュビナタイム・レディネステストなど)

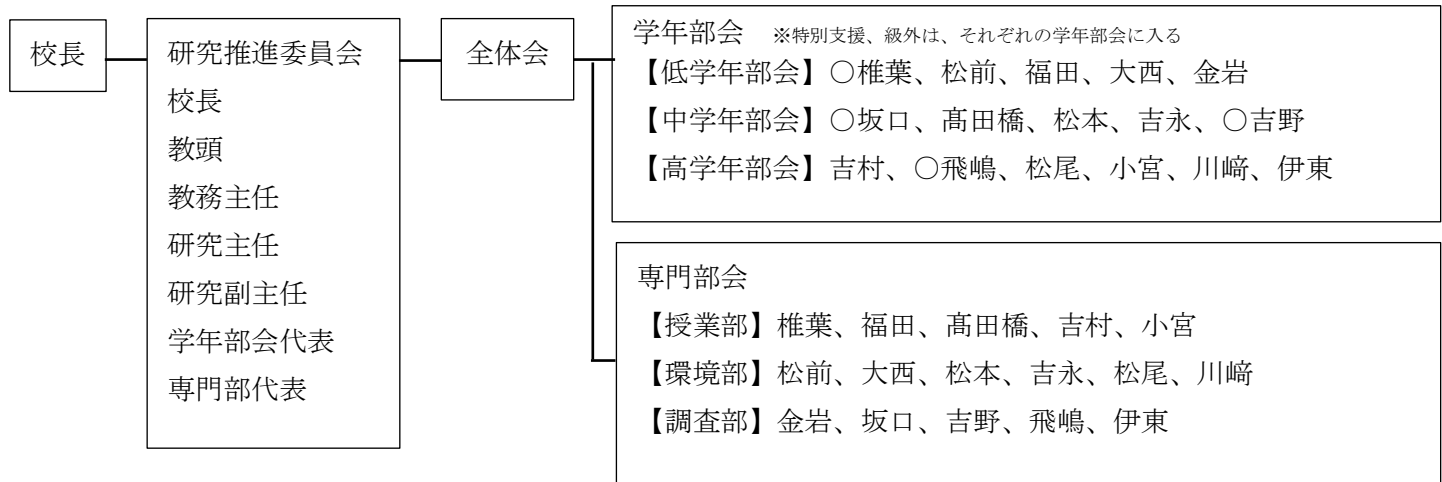
(3) 単元を通して身につける力の明確化

- ・単元を通して身につける力の児童と教師間での共有
- ・単元を通したふり返しシートの工夫

(4)学習環境づくり

- ・児童の学び方の統一(授業部)
- ・児童が興味、関心をもつ算数コーナーの設置(環境部)

6. 研究の組織 ※ ○印は代表者



7. 授業計画

代表授業	校内全体研	低学年部 1 本	10 月 1 日	指導案
		中学年部 1 本	6 月 4 日	
		高学年部 1 本	7 月 1 日	
代表授業	公開授業	全体から 1 本	11 月 28 日	指導案
SG 授業	SG 研	代表授業者以外全員	1 学期～ 2 学期	略案